

『独逸文学』執筆要領

関西大学独逸文学会

2016年1月改正

全般的なこと

1. 原稿の規格

- 1) A4版横書き。文字の大きさは10.5ポイント。欧文の字体はCentury。
- 2) 日本語の場合：1ページ全角32文字×32行。
ドイツ語の場合：1ページ半角64文字×32行。
- 3) 注は脚注とする。

2. 原稿の種類と枚数

- 1) 研究論文：20ページ程度。
（日本語で執筆する場合には上記規格で2ページ程度のドイツ語レジュメを添える。その際、ネイティヴチェックを受けること。）
- 2) 翻訳：20ページ程度。
- 3) 研究ノート：12ページ程度。
- 4) マルジナリア：8ページ程度。
- 5) 書評：4ページ程度。
- 6) 新刊紹介、エッセイ：2ページ程度。

執筆要領A（日本語で執筆する場合）

1. 引用文について

- 1.1. 日本語の引用文は「」でくくる。
- 1.2. 引用文中の引用は『』でくくる。
- 1.3. 読点は引用符の外側に、句点は引用符の内側に打つ。
（例）「レトリック構造」、この概念はこの研究者が初めて用いた。
「大きな転換期を迎えたのであった。」
引用のあとに文が続く場合、引用文に句点につけない。
（例）著者は「大きな転換期を迎えたのであった」と述べている。

- 1.4. 引用文の一部を省略する場合は、[…](全角のブラケットと中黒3点)で表す。省略がある程度長い場合は、[前略]、[中略]、[後略]と書く。
- 1.5. 執筆者本人による追加、挿入には[]を用いる。
- 1.6. 引用符が付いた語句のあとに原語を添える場合、原語は引用符の外に置く。○「揚格」(Hebung) ×「揚格 (Hebung)」
- 1.7. 数行にわたる長い引用文は、独立させて、上下に各1行分あけ、左端は全体を2字分下げる。その際、引用符は付けない
(例) 帰国のその年に行った講演「国語と国家と」の中で、上田はドイツを例に出して、まさに次のように述べている。

如何に亦現今の独逸が、[…] 其国語を尊奉し、其中より外国語の原素を棄て、自国語のよき原素を復活せしめつつあるかを見よ。[中略] 此事は現に科語[専門術語のこと]を外国語に借る事多き、科学の上に進みつつあるなり。

このような「国語改良」の文明国ドイツというイメージはその後わが国で定着した。

2. 注について

- 2.1. 原則として脚注とする。文字の大きさは9ポイント。句点またはピリオドを必ず打つ。
- 2.2. 注番号は右肩つきアラビア数字で示す(例：過去形²)。
- 2.3. 注における文献表記

注で文献を初めて表記する場合は、著者名、書名・論文名、出版年のほかに出版社を記す。(欧文の場合の出版社名は省略可。) 論文の場合は掲載された書名や雑誌名も記す。

すでに注記した文献を再び用いる場合は、「著者□出版年、○○ページ」と記す。

(例) 特別な「上級裁判所」¹を設けたが、かかる存在を認識し²、[…]なのであった³。

1 高橋進「ドイツ統一」、成瀬治編『ドイツ史 3』、山川出版社、1997年、537ページ。

2 高橋□1997年、538ページ参照。

3 高橋□1997年、544ページ以下参照。

(洋書は執筆要領Bの3.4.「注における文献表記」を参照せよ。また洋書、和書とも「文献一覧」における文献の書き方も参照のこと。)

巻末に文献一覧を挙げる場合(3.参照)は、初めから「著者□出版年、○○ページ」と表記してもよい。

注で同じ文献を連続して挙げる場合は、2つめ以降は「同上、○○ページ」とするか、もしくは文献(著者、出版年)を繰り返してもよい。

(例) 1 工藤 1985年、35ページ。

2 同上、38ページ。[工藤 1985年、38ページ。も可]

2.4. 本文における文献表記

注ないし文献一覧において詳しい文献表記がなされるので、本文での文献表記は不要であるが、もし本文にも文献情報を記したい場合は簡略化したものにする。例えば、高橋(1997)とは、注もしくは文献一覧における1997年発行の高橋の著作を表わす。

(例) 上述の野田(1965)の見解とは対照的に、高橋(1997)は…¹と述べている。

1 高橋進「ドイツ統一」、成瀬治編『ドイツ史 3』、山川出版社、1997年、537ページ。

3. 巻末の文献一覧の挙げ方(△は半角空き、□は全角空き)

巻末に「文献一覧」を載せてもよい。以下、載せる場合の注意点を述べる。

3.1. 欧文、和文の順に挙げる。欧文は姓、名の順に書き、その間はコンマで区切る。欧文は姓のアルファベット順、和文は姓の五十音順に挙げる。句点またはピリオドを必ず打つ。

3.2. 単行本の場合

[欧文]

著者：△書名（イタリック体）。△出版地：△出版社，△出版年。
出版地が複数の場合はスラッシュで区切る（欧文の場合の出版社名は省略可、以下同様）。

2行以上にわたる場合、2行目以下は半角4文字分下げる
（3.3.においても同じ）。

（例）Wolf, Gerhart: *Deutsche Sprachgeschichte*. 3. Auflage. Tübingen/
Basel: Franke, 1994.

（3. Auflage ではピリオドの次を半角空ける。）

[和文]

著者（訳者名）『書名』、出版社、出版年。

2行以上にわたる場合、2行目以下は全角2文字分下げる
（3.3.においても同じ）。

（例）二谷真也『リルケの詩』、浩耶社、1979年。

ハインリッヒ・プレット（永谷益朗訳）『レトリックと
テキスト分析』、同学社、2000年。

3.3. 編著書中または雑誌中の論文の場合

[欧文]

著者：△論文名（引用符付き）。△In: △雑誌名（イタリック体），
△出版年，△ページ。

（例）Lühr, Rosemarie: „Zur Syntax des Nebensatzes bei Luther“.
In: *Sprachwissenschaft* 10, Heft 1, 1985, S. 26-50.

著者：△論文名（引用符付き）。△In: △編者（Hrsg.）: △書名（イ
タリック体），△出版地：△出版社，△出版年，△ページ。

（例）Stierle, Karlheinz: „Das Lachen als Antwort“. In: Preisendanz,
Wolfgang (Hrsg.): *Das Komische*, München: Willhelm
Fink Verlag, 1976, S. 339-351.

[和文]

著者「論文名」、編者『書名』、出版社、出版年、ページ。

（例）高橋進「ドイツ統一」、成瀬治・山田欣吾・木村靖治編『ド
イツ史3』、山川出版社、1997年、510-537ページ。

著者「論文名」、『雑誌名』巻数、号数、出版年、ページ。

(例) 高橋輝暁「愛の逆弁証法の詩の幾何学」、立教大学ドイツ文学科論集『ASPEKT』第2巻、第30号、1996年、33-53ページ。

- 3.4. インターネットのホームページからの引用は、アドレス (URL) とともにアクセス日を記す。

(例) <http://www.ds.unizh.ch/index1.html> (2014年11月5日アクセス)。

執筆要領B (ドイツ語で執筆する場合)

1. 全般的なこと

- 1.1. 原則として新正書法に準拠する。

- 1.2. 本文中で書名、雑誌名を示すときは、イタリック体を用い、作品名、論文名を示すときは、引用符を付けて表す。

(例) Goethes *Hermann und Dorothea* war damals ...

... die kritische Darstellung von W. Schröder: „Zur Präroman-
tiktheorie“ ...

- 1.3. 改行した段落は、半角3文字分空けて書き始める。

2. 引用文について

- 2.1. 引用文は,, “でくくる。

- 2.2. 引用文中の引用は, ‘でくくる。

- 2.3. コンマは引用符号の外側に、ピリオドは引用符号の内側に打つ。

(例) „Rhetorische Struktur“, dieser Begriff ist [...]

„Hier gab es eine konsequente Wende.“

- 2.4. 引用文の一部を省略する場合は、[...] で表す。

- 2.5. 執筆者本人による追加、挿入には[]を用いる。

- 2.6. 数行にわたる長い引用文は、独立させて、上下に各1行分あけ、全体を4字分下げる。その際、引用符号は付けない。

(例) Das Lemma „Anständigkeit“ wird von Adelung so definiert:

Die Anständigkeit (1) Die Eigenschaft des äußern
Betragens so wohl, als des sittlichen Verhaltens, nach

welcher es der Würde gemäß ist [...]. (Adelung 1793, 1. TL, 378)

So kommt das Wort „Anstand“ in der Stilistik verbunden mit „Ernst“ und „Würde“ gereiht vor.

3. 注について（△は半角空き）

- 3.1. 原則として脚注とする。大きさは9ポイント（Century）。ピリオドを必ず打つ。
- 3.2. 注番号は右肩つきアラビア数字で示す。
- 3.3. 当該箇所が2ページにわたる場合は S. △154f.、3ページ以上にわたる場合は S. △154ff. 等と表記する。
- 3.4. 注における文献表記

注で文献を初めて表記する場合は、著者名、書名・論文名、出版年、出版社を記す。（出版社名は省略可。）論文の場合は掲載された書名や雑誌名も記す。

すでに注記した文献を再び用いる場合は、「著者（出版年），S. ○○」のように記す。

（例）1 Barz, Helmut: *Selbsterfahrung*. Stuttgart: Kreuz Verlag, 1973, S. 38.

2 Lühr, Rosemarie: „Zur Syntax des Nebensatzes bei Luther“. In: *Sprachwissenschaft* 10, Heft 1, 1985, S. 26-50.

3 Barz (1973), S116.

巻末に文献一覧を挙げる場合（4.参照）は、初めから Barz (1973), S.38. のような簡略化した表記でもよい。

注で同じ文献を連続して挙げる場合は、2つめ以降は Ebd. ないし ibid. とするか、もしくは文献（著者、出版年）を繰り返してもよい。

（例）1 Harting (2007), S.35.

2 Ebd. S.37. [Harting (2007), S.37. も可]

3.5. 本文における文献表記

注ないし文献一覧において詳しい文献表記がなされるので、本

文での文献表記は不要であるが、もし本文にも文献情報を記したい場合は簡略化したものにする。例えば、Harting (2007) は、注もしくは文献一覧における2007年発行の Harting の著作を表わす。

(例) Im Gegensatz zu Neumann (1965) sagt Harting (2007), dass ...¹.

1 Harting (2007), S.37.

4. 巻末の文献一覧の挙げ方

姓 (Zuname)、名 (Vorname) の順に書き、その間はコンマで区切る。姓のアルファベット順に挙げる。その他、執筆要領 A の [欧文] と同様。